

## 道院・世界紅卍字会と大本教 —提携初期における協力の実態と「満蒙」—

玉置 文弥

### はじめに

道院は“宇宙の主神”「至聖先天老祖」（以下、老祖と呼称）降臨を起源として、中華民国時期の1921年済南において正式に発足した民間宗教団体で、世界紅卍字会（以下、道院・世界紅卍字会は原則紅卍字会に統一する）は道院の教義に基づく実践機関として設置された。紅卍字会は日本の関東大震災への救恤や、南京大虐殺での遺体埋葬・伝染病防止など国内外を問わず積極的な慈善活動を行った。一方、大本教（現在の正式名称は大本である。また時期によって名称が変更されることもあるが、本稿では原則として大本教に統一する）は1892年に京都府綾部において出口なおが「良の金神」の神がかりとなって開いた神道系の新宗教団体であり、なおの五女澄子の婿で大本教「聖師」出口王仁三郎（本名上田喜三郎）により国内外で発展し、二度の国家的弾圧にあったことで知られる。これら一地方の民間宗教は、1923年に提携を結び日中双方での活動を行っていく。主に慈善活動によって様々な有力者が加入し、民衆の支持も受けて社会的・政治的影響力を持った両教団の連合運動は、「満蒙」（以下、原則として括弧無し）において張作霖や日本軍など様々な勢力と関係し政治的活動を行っていく。本稿ではこの紅卍字会—大本教による連合運動の実態を考察する。それはどのような経緯で政治的活動に至ったのか、特に提携初期の活動実態について今までの研究では不十分かつ不明な点が多い。

では、先行研究を具体的に見ていこう。まず道院・世界紅卍字会についてであるが、その研究の嚆矢は末光高義によるものである（末光高義、1932）。末光は青幫、同善社、道院など清末から民初の中国における主要結社に着目し、実地調査と膨大な資料から各団体の特性や組織を明らかにしてその重要性を論じた。紅卍字会については、それを「道院の事務執行機関」とし、起源や教義、組織、綱領、加入者などを明らかにしている。その上で「今日支那の社会事業團體としては紅卍字会の右に出るものはなく最有力な團體」であるとす。また紅卍字会の本体である道院については、「世界大同宗教統一を標榜」しながらも「如何にもクラシカルの形式を保有し、階級意識を多分に含み、又神秘的のあるものを加味」した点に特徴を見出している。末光の研究に対して、主に教義面について研究を行い中国の「結社」研究を飛躍的に向上させたのが酒井忠夫である（酒井忠夫、2002）。戦前東亜研究所の調査員であった酒井は、現地地様々な「結社」に入会して資料収集を行い、それぞれの教義や活動を体系的に検討して論じた。酒井は紅卍字会を「宗教結社」と

定義し、その教義の中心の一つである「五教合一」論や「善行」の実践といった特性から、紅卍字会は中国の「民族的宗教の伝統」の系譜に属するものとして、その歴史的意義を見出した。近年では、「救世団体」（以下、原則として括弧無し）の概念を提示した Prasenjit Duara による研究が注目されている<sup>1)</sup>。Duara は主に、「満洲国」（以下、原則として括弧無し）と救世団体の関係について論じた。それによれば、紅卍字会など「国民党下ではほとんど違法な立ち位置」にあった救世団体は、満洲国政府によってその統治のため「公的な範疇」に取り込まれた。これにより、「救世団体」における「すべての人は救われるという救済思想」は、満洲国政府によって「東対西の文明の衝突という戦争プロパガンダに転換」させられた。つまり、救世団体は「多民族国家」満洲国における「民族統合」の役割を果たし、さらには東西文明の対立にまで「昇華」させられたのである。このような Duara の研究は、各民族や文化の統合という「超国家主義」の観点から救世団体を考察する点で極めて示唆に富むものであるが、救世団体を総体的に捉え概念的に論じているために、その活動実態が論じられていないという不満が残る。他方、中国では紅卍字会の一次史料や档案を用いて、紅卍字会の設立経緯、内部構造、組織規模について、さらには紅卍字会の二大慈善活動である「臨時慈善事業」と「永久慈善事業」の内容を事例を挙げながら明らかにし、紅卍字会における慈善事業の実態を網羅的に示した（李光偉、2012、2017、高鵬程、2011、2015）。また教義については、宮田義矢が道院の『太乙北極真経』の形成過程を、江朝希の『息戦論』や他の救世団体、キリスト教の影響などから論じている。特に「五教合一」論（儒・仏・道・基・回の集合と統一）を、最も体系的かつ詳細に明らかにした研究と言えよう（宮田義矢、2015）。

一方、大本教についての研究は村上重良によるものが著名であり（村上重良、1973、1974）、特に王仁三郎の「入蒙」（以下、原則として括弧無し）に関連して大本教と紅卍字会の関係が論じられている。村上はずまず王仁三郎の満蒙論が、当時の日本の大陸拡張主義に自らの「宗教的基礎を付け加えたもの」であり、それは「日本帝国主義の大陸侵略工作の延長線上にあ」ったとする。一方の紅卍字会は「日本の中国大陸進出には多分に迎合的な団体であったために、入蒙をはじめとする王仁三郎の満蒙での活動に対して積極的に協力したとする。そのため両教団の関係は、日本の大陸侵略に加担したものとして矮小化され、その複雑な関係性や活動については論じられていない。また「万教同根」や「五教合一」といった互いの宗教統一思想についても、侵略のための宗教利用として否定的な評価を下している。川村邦光は大本教史全体を、「おふでさき」・「霊界物語」などの教義や、教団機関誌などを用いて、なおと王仁三郎間における教義・活動面での断絶と継承、そし

---

1) 救世団体とは Prasenjit Duara によって提出された概念である。清末から民初の中国で勃興した「宗教」団体（紅卍字会、同善社など）を指す。教派主義・三教合一の思想および扶乩の使用という中国宗教の伝統的要素と、20世紀初頭の国際的な厭戦・反戦気運への対応という近代的要素から成り立っており、その主張すなわち「救世」実現のために慈善事業を行って、民衆に幅広い支持を受けた。すなわち伝統と近代化が結びついた点に新規性を見出すものである（Prasenjit Duara、2004・2011）。

て王仁三郎の「国際主義」から「国粹主義」への転換を中心に述べている（川村邦光，2017）。だが、決定的に重要な紅卍字会との提携については、「王仁三郎のアジア主義、『満蒙』への関心とも結びつ」くきっかけであったという言葉に留まっている。その満蒙については長谷川雄一が、本稿で取り上げる王仁三郎の入蒙と、「興亜主義者」末永節らによって明治後期ごろから唱えられた「大高麗国」構想なる民衆の大陸政策との連続性を指摘している（長谷川雄一，1982）。それも含めた大本教の海外展開を歴史・地域的に広い視点から位置付けをはかったのはナンシー・K・ストーカーで、大本教は王仁三郎によって「国際的宗教複合体」へ発展したとし、それまでの侵略と被侵略の構図に留まらない「国際」的な大本教の存在を明らかにした。そしてその背景にある「万教同根」の「信念」実現のために紅卍字会など海外の宗教団体と提携し、それは実際に国際交流のメカニズムとして機能したとする（ナンシー・K・ストーカー，2009）。しかし、その裏付けとして示される活動は、『大本70年史』や王仁三郎の著作に沿って経緯が述べられるに過ぎず、極めて理念的な記述となっている。

以上のような両教団が行った連合運動を、満洲国との関係において中心的に論じたのは孫江である（孫江，2012，2016）。1923年の紅卍字会—大本教の提携や、その後の連合運動が満洲国「建国」にどのように関与したかについて、一次史料に基づいて実証的に明らかにしている。さらに紅卍字会など「宗教」団体に対する満洲国政府の宗教政策を論じ、その変容を明らかにしてもいる。にもかかわらず、1923年の両教団提携直後については空白のまま残され、本稿で取り上げる入蒙など両教団独自の活動が捨象されているために、なぜ連合運動が満洲国「建国」運動のような政治的方向へ向かっていったのか、さらに満洲国統治にどのような経緯で組み込まれていったのかについて解明出来ていない。

以上の先行研究における成果と課題を踏まえ、本稿では従来宗教研究の枠組みでなされてきた紅卍字会と大本教に対する研究を、歴史研究として行うことで両教団の提携初期の活動実態を実証的に明らかにする。その際、筆者が主に大本教亀岡天恩郷で収集した一次史料や、紅卍字会および大本教の新聞や雑誌、日中両政府の公文書などの史料を用い、具体的な事例として①紅卍字会と大本教の提携・「神戸道院」の開設、②王仁三郎の入蒙、③世界宗教連合会を取り上げる。この試みによって、連合運動が政治性を帯びていった背景を明らかにし、宗教と政治の近現代における関係を浮上させる。そして、日本の満蒙侵出の歴史に新たな視点を提示したい。

## I. 両教団の提携と「神戸道院」の開設

民国初期の中国では、紅卍字会のほか同善社や一貫道など救世団体と言われる宗教的慈善団体が多く生まれた。これらは戦災等の社会危機に対し、「扶乩<sup>2)</sup>」に代表される中国の

---

2) 「霊媒的な」二人が、中央に筆がついた三尺ほどの棒を持つと、その筆が勝手に動き砂の上に文字を著す。そしてその文字を筆録者が紙に記録していく。日本では「こっくりさん」(planchette)ともいわれる方法で、道院では神の意志が示されるとされ、これに則って行動する（末光高義，

伝統的宗教手段を介して、「道」に基づく「善行」の実践という東洋的価値と、社会秩序の復興を目指して活動した。その一方で、当時中国において大規模な宣教運動を行った欧米のキリスト教団の影響を受けてもいた。紅卍字会には中国人のキリスト教徒が多く所属しており<sup>3)</sup>、内部でのキリスト教研究は極めて盛んであった。主に聖書の解釈が行われ、道院の最高神老祖はヤハウエと同一であることなどが論じられた。加えて、中国伝統の「善」概念とキリスト教の社会的実践の理念は一致しているとし、キリスト教団が既に行っていた慈善活動を高く評価した（褚瀟白，2019，p. 119）。しかしながら、当時はキリスト教が欧米帝国主義の尖兵として「非基督教運動」や、宗教否定の「非宗教大同盟」からの強い批判にさらされていた時代であり、キリスト教の影響を受けていた紅卍字会もその余波を受けた。これへの対抗として紅卍字会はキリスト教も含めた「五教合一」論を唱えた。これは、世界中の宗教は元来一つであったが時代が進むごとに分派し、近代に至りその対立が激しくなり世界中で戦争をするようになったため、宗教を再び統一することで「世界平和」をもたらすべきであるという宗教理論である。紅卍字会はこれを用いて、各宗派は本来一つの「宗教」であるから「一宗派」のキリスト教批判は無意味であること、そして自らを『宗教』から偏見・固執を取り去り、すべてに共通する普遍的な真理のみを取ったもの（宮田，2015，p. 114）（＝「超宗教」）すなわち「宗教」でないと規定することで、当時の反キリスト教・反宗教潮流に対し自らの正当性を示そうとした。つまり紅卍字会は、中国の民間宗教として東洋の伝統的価値観を認めながらも、キリスト教の慈善活動や反戦機運に伴う宗教的普遍主義など欧米の影響をも受けて活動していた。また、扶乩は非科学的・迷信的であるという新文化運動からの批判には、いわゆる「自動書記術」についての欧米における「科学的」解釈を示し、扶乩が科学性を有するとしてその批判を払拭しようと試みてもいる（宮田，2015，pp. 122-123）。

そのような状況下で慈善活動を開始した（1921年7月から）紅卍字会は、当初は中国紅十字会の活動を補う形で、のちに紅卍字会の「臨時慈善事業」となる民衆への救援物資配布や診療などといった災害救援を行った（宮田，2015，p. 81）。さらに「永久慈善事業」として病院や学校、児童養護施設などの運営も行った。このような活動は、政情不安で公的救助が不足する中で大きな社会的要請を受け、一般庶民だけでなく政治家、紳商、軍人など多くの有力者が信者・会員として紅卍字会に加わる要因となった。これにより団体自体が大きな社会的・政治的影響力を有し、新興の宗教団体としては異例の発展につながっていく。

1922年1月、北京政府内務部に認可された紅卍字会は中国全土での慈善活動が可能となった。それが国外にまで及んだのは、1923年9月1日に日本で発生した関東大震災に

---

1932，pp. 306-307，山口利隆，1938，pp. 10-11）。

3) 褚瀟白によれば、大本教との提携に尽力した侯素爽は済南教会所属のキリスト教徒として著名であり、山東基督教大学（現在の山東大学の一部）芸術・神学院の教授であった Frederick Segurier Drake らと交流があった（褚，2019，p. 120）。



際してであった。日本に対し各国から様々な救援が行われる中、紅卍字会も「慈善事業を宗旨としており、善行を導くことには重大な意義がある。そこで友邦のために、巨額の救援金と援助の協力を多くの慈善家に求める（済南道院「済南紅卍字会籌賑日本巨災募捐啓」済南道院編、1923）」と寄付の呼びかけを行い、さらに翌月7日、紅卍字会は自ら震災救援のため日本を訪れたのである。この訪日の実現は、すでに孫江が指摘しているとおり当時在南京領事で大本教・紅卍字会の信者であった林出賢次郎の紹介によるものであった<sup>4)</sup>。林出は「日支ノ提携ハ宗教ノカニヨルモノトシテ領事館内ニ全教（紅卍字会一引用者）ヲ安置シ礼拝シ（JACAR Ref. B12081580300（第6画像目）宗教関係雑件第三卷「44、神戸道院」外務省外交史料館）」ていた紅卍字会信者で、この訪日を機に、日本の新宗教団体と提携させたいと考え、「自己ノ信スル大本教視察ヲ勧誘（JACAR Ref. B12081580300（第6画像目）宗教関係雑件第三卷「44、神戸道院」外務省外交史料館）」したのである。

当時の大本教は「皇道大本」と名乗り、信徒30万人を数える日本最大規模の新宗教教団に成長していた一方で（ストーカー、2009、p.120）、第一次大本事件（1921年）の弾圧を受けた直後であった。その実権は、出口なおから出口王仁三郎に移り、第一次世界大戦後の心靈主義を背景とした病氣治しや、「大正維新」なる革命論の提唱を主として活動していた。その組織体制は、本部においては「祭」・「政」の活動が分轄され、前者は四方平蔵を寮長とする「内事寮」が、後者は浅野和三郎を総裁とする「大日本修齋会」（1908年-1913年の大本教の教団名）が担当し、それらを「教主補」の王仁三郎、二代教主澄子が統括するという形を取った。その本部組織下には、主たるものとして大正初期に結成した「直霊軍<sup>5)</sup>」（布教部隊）や大本教機関紙発行を行う「天聲社」を構え、各地での布教・宣伝に力を入れていた。以上のように大本教は組織の充実と教勢拡大をしていたが、弾圧を受けたことで教団活動の存続が危ぶまれる状況となり、活動方針の転換に迫られていた。

そのような中での紅卍字会の大本教訪問である。紅卍字会一行は、被災地である関東地方の視察を終えると神戸に向かい、その後天理教などを訪ね半月ほどを過ごした。11月3日、ついに一行は京都府綾部の大本教を訪ね、まず二代教主出口澄子と面会した。この時

---

4) 孫江によれば、関東大震災に際して紅卍字会に大本教を紹介し、さらに救援金10,000元、米2,000担の寄付を可能にするために奔走したのは林出である（孫江、2012、p.79）。「紅卍字会一行に指示して、まず天理教に行かせたが、「多く得ル所無カリシモノノ如クニシテ（JACAR アジア歴史資料センター Ref. B12081614300（第50画像目）宗教関係雑件／大本教ト紅卍提携ノ件「紅卍字教調査ニ関スル件」外務省外交史料館）」大本教を訪れたという。だが見逃せないのは以上とは異なる内容の記述である。それによれば、道院の一行は最初に兵庫県庁を訪ねた。県が調査を行ったところ、神戸の六甲に住む大本教信徒「片岡六甲仙人」（片岡春弘大正生命保険会社社長）が古くから道院と関係を有し、関係する書画を多く所有していたため彼に引き合わせた。そして彼の案内で亀岡の大本教へ行き、王仁三郎に面会し提携が成ったというのである（神戸主会編纂会編、1972、pp.23-24）。今回は触れられないが、紅卍字会と日本人の出会いがいつなのか、調査の必要があるだろう。

5) 直霊軍は1915年に設立された大本教の布教組織で、10階級の階級制度を有し若年の男女によって構成された。大本教の出版物の配布や歌唱を行い、世論喚起を目的とした。

澄子は幹部の山口利陸に「(大阪出張中の一引用者) 聖師さんに電報を打ってよ (山口利陸, 1957, pp. 7-8)」と命じた。翌日、紅卍字会一行は綾部に戻った王仁三郎と面会を果すと、亀岡天恩郷にも訪れ互いの教理について議論を交わした。その結果、①「五教合一」(紅卍字会)と「万教同根」(大本教)の一致、②「神託」を受ける方法(大本教は「お筆先」道院は「扶乩」という)の類似、③両教団とも神託に提携を行うように示されている、として提携を決定した。ここでまず、提携について紅卍字会の言及を当時の史料『道慈綱要大道篇(二)』から見ておこう(傍線引用者、以下同じ)。

道院創始以來。二三年間。推行中國各省縣。數已逾百。尚未出國門也。有之、自日本神戶道院始。故神戶設院。爲道務發展期中最可紀念之一端。茲分爲三日述之。

(子) 發端 民國十二年。(癸亥) 當日本大正十二年九月一日。東京橫濱市區一帶突起大地震。灾情甚劇。時值傳授正經之際。奉訓以救災卹難。爲道院卍會應有之責。派素爽、時充濟南道院華和、時充北京道院慈院附圓誠、三人。東渡慰問。並携糧欸。分別賑。濟事畢。華和先歸國。爽、誠、由東京折回神戶。專事佈道。介引神戶之總副領事、及華商會會長等、六七八人求修。是爲佈化東瀛之發端(瀋陽道院編, 1932, pp. 80-82)

これによれば、道院は「奉訓」つまり老祖による神示によって救済を行うため、侯延爽、楊圓誠、馮華和の三人を日本に派遣して食糧と義援金を寄付した後、馮以外の二人は東京から神戸に向かい布教活動を行った。これに合わせて神戸では中国領事館関係者を中心とする中国人 67 人が彼らのもとを訪れて入信したという。この「道院の発展期において最も記念すべきことの一つ」であった提携については、大本教も両教団の「神示」によって示されたものとし(大本 70 年史編纂会編, 上, 1964, p. 702)、同時に紅卍字会の「五教合一」の精神を高く評価している。幹部の北村隆光が提携の目的を次のように述べている。

支那ノ道院ハ立教約二ヶ年ニシテ約三百萬人ノ信徒ヲ有シ支那全土ノ人口ニ比スレバ大ナリト云フベカラザルモ其ノ教勢熾烈ニシテ信者ニハ多ク知識階級ノ人ヲ網羅シ教旨我大本教ニ酷似シ自然提携ヲ容易ナラシムルモノアリト思料ス大本教ノ神言紅卍會ノ天啓ニヨル暗示之レ悉ク同一神ノ意志ノ表示ニシテ畢竟スルニ同一宗教國ト名称トヲ異ニシ兩國ニ現ハレタルノミニシテ日支兩國ノ提携ハ先ヅ兩教ノ提携ニヨリ完成セラルベシ大本教ガ支那<sup>ママ</sup>希教ニ着手スルノ日モ遠キニ非スト信ズル(JACAR Ref. B12081614200 (第 47 画像目) 宗教関係雑件/大本教ト紅卍提携ノ件「大本教及世界紅卍会提携運動ニ関シ大本教幹部ノ来往ニ関スル件」外務省外交史料館)

北村は、大本教と紅卍字会は国と名称とが異なるだけであってほぼ同一のものであるから提携は自然であり、それは日中関係上重要であるとしている。このように、両教団は提携が宗教的根拠によるものと強調し、紅卍字会「五教合一」と大本教「万教同根」は一致するとした。前者では老祖、後者では「天之御中大神」が「最高神」とされるが、それらは「一つの神」が異なる名称で現れただけで、本来は同一であるから提携は「自然」であるとしたのである。さらに「道ノ國」である日中両国は「天地の大道」によって世界和平を招来すべきとし(「神戸道院開院式に参す」河津雄次郎編, 1924, p. 38, 「佛祖釋尊の神靈降臨して『道』の大元を説示す」河津雄次郎編, 1924, p. 41)、両教団は「道」の概念

においても一致するとした。とは言え、教勢拡大という共通の現実的動機があったことは明らかである。大本教は教団存続のための一手を中国布教に求め、その方法を紅卍字会との提携により獲得しようとし、一方の紅卍字会は日本にその教勢の拡大を図った。すなわち提携には、自団体の維持・拡大という大きな要因があった（佐々充昭，2020，p. 1631）。これに対し日本政府は、①震災慰問という名目で訪日したが実際は自団体の拡大に目的があるのではないか、②「邪教」大本教と提携するのは好ましくない、③紅卍字会は「共産主義者」の団体なのではないか、という一部の外れな見解を示し警戒を強めた（JACAR Ref. B12081614200（第33，76画像目）宗教関係雑件／大本教ト紅卍提携ノ件「北京世界紅卍會及大本教提携布教計画ニ関スル件」・「大本教ニ関スル件」外務省外交史料館）。その後、大本教の北村らは11月と翌年2月の二度にわたって、中国山東省済南へ赴いた。特に2月には16日から10日間滞在している。

済南に於ては五日間道院の院監郭景星氏の邸宅に宿泊し、道院に於て諸般の要務を果し、滞済中藤井済南總領事を訪問し、大本及び道院の事並びに今度の神戸の道院開設につき大に談ずるところありて領事の了解と聲援を得……、次で北京道院に赴き茲にも五日滞在中日本公使館に於て清水副領事及び波多野所長に面談し開院につき了解を求めし處大に賛意を表し、尚同氏の紹介にて北京週報の主幹藤原鎌兄氏を訪ね宣傳を爲したり……（「佛祖釋尊の神靈降臨して『道』の大元を説示す」河津雄次郎編，1924，pp. 43-44）

そこでは、林出賢次郎や道院、紅卍字会の支部、日本公使館などを訪れ、道院開設の準備、道院への「入信」を行い、その後3月2日に北村らは帰国する。

1924年3月6日、神戸道院開院式が挙行され正式に発足する。それは六甲山附近に位置する大本教信徒片岡春弘宅に設立された<sup>6)</sup>。開院式の案内状によれば（出口宇知丸・大本総務上西六合隆ほか，1924，2，28，書簡）、「各方面全く行詰まり」の状態である現代は、このままでは「由々敷大事」を引き起こしかねない。そこでまず大本教と道院が共同で神戸道院を開院することで、日中親善の第一歩を踏み出し、「国交上及び精神上」の安定を図るというのがその目的である。開院式には、大本教幹部の面々と、道院・紅卍字会の候延爽ら、さらに駐神戸兼大阪副領事李家駒、神戸大阪駐箚中華總會司理、同文学校長、商務總會会頭を含めて約250名が参加した（「神戸道院開院式に參す」河津雄次郎編，1924，p. 35）。

## II. 出口王仁三郎の入蒙

### 1) 王仁三郎の動機と思想

神戸道院の開院式に王仁三郎の姿はなかった。それはなぜか。この時、第一次大本事件の裁判中の身で責付保釈中の彼は、「宗教国家建設」と称してひそかに満蒙へ入っていた。

---

6) これは無償の提供であった。

事件後の教団の活路を、紅卍字会との提携を機に海外へ求めその第一歩を満蒙と見定めたのである。

王仁三郎が満蒙を目指し綾部を発ったのは1924年2月13日の事であった。これは大本教の一般信徒には伝えられず、ごく側近らのみ知らされたようである。その時の王仁三郎の演説が大本教機関紙『瑞祥新聞』に記されている。

……これより彼は俄に渡支の決心を定め、今夜の内に出發せん事を数名の側近く侍する役員に告げた。あまり急激な彼の宣言に侍者は稍狼狽の氣味であつた。けれども彼は神命を信じ、是非今夜出發せんと決心した上は彼の平素のやり方に對し、到底その考へをひるがえす事は出来ない事を知つてゐた。……『……我大本は既成宗教の如く現界を厭離穢土となし未來の天國や極樂浄土を希求するのみの宗教ではありません國祖の神の仁慈無限なる神勅により日本神洲の民と生れたる我々帝國の臣民は此尊き大神様の御神示を拜し上は御一人に對し奉り下は同胞の平和と幸福のためのみならず東亞諸國、並びに世界の平和を來すべき神業に奉仕せなくてはならない責任を持つてゐるのは大本信者であります……（「出口王仁三郎蒙古入の雄圖—入蒙の宣言」『瑞祥新聞』1925, 2, 1)』

王仁三郎が突如として満蒙行きを決心したことが分かる。さらに、王仁三郎が日本の存立のためには①資源問題、②人口問題、③安全保障問題を解決しなければならないとし、現実的かつ具体的な政策について述べたことも記されている。いわく、「我國が上下一致努力して既定の開業を徹底せしむる」ため「我對支政策全部の基調を満蒙に」置き、「行詰つた日支關係の現状を相互的に善導」しなければならない（「出口王仁三郎蒙古入の雄圖—入蒙の宣言」『瑞祥新聞』1925, 2, 1）。その具体的方策として、「氣息奄々として瀕死の境にある我國の既成宗教」の中で唯一「英雄的宗教家」の王仁三郎自身が（「出口王仁三郎蒙古入の雄圖—入蒙の宣言」『瑞祥新聞』1925, 2, 1）、武器を持たずに満蒙へ行きその先鞭をつけようというのである。それを實現するには「日支親善」を基礎にして蒙古に「王国」を建設する必要がある。それが王仁三郎の次の一節に表されている。

「我々は此の際国家のため、東洋のため……第一支那の耳目を蠢動するに足る、公平無私なる精神的表示を以て、最も強き感動を与へ、両國民間の感情を融和し、以て漸次に良好なる結果を招くことに努力せなくては成らぬ。要するに日支兩國共通の大理想を樹てて、それを現実化せしむるより外はない（大本70年史編纂会編、上、1964, p. 719)』

もともと王仁三郎は第一次大本事件以前に、元軍人で中央アジア踏破を果たした相談役日野強の探検談に感化され、アジアへの関心を強く抱いていたが<sup>7)</sup>、入蒙の具体的な動機

---

7) 日野（1866-1920）は日露戦争にも従軍した探検家であり、後に大本教信徒となる。陸軍の命による新疆などの大陸調査や、大谷光瑞探検隊への随伴、中央アジア見聞録たる『伊犁紀行』（1909年）の執筆などで知られる。林出賢次郎とは舅と婿の關係であった（ストーカー、2009, p. 218, 『大阪朝日新聞』1933年11月24日）。



は何であったのか。言うまでもなく、「満洲」(以下、括弧無し)にも広がり始めていた紅卍字会との提携は重要であった。王仁三郎自身「さいわいに中国道院との提携によって、道院の宣伝使としての資格をももつにいたった関係から、宗教の布教には障害がない(大本70年史編纂会編、上、1964、p.719)」と述べている。当時満洲における紅卍字会は、1922年6月に張作霖の秘書長談国桓が「瀋陽道院」を設立して以降勢力を拡大し、分会・支部、信者が次々と増加していた。これは談の説得により入信した張作霖と張学良が、紅卍字会を自らの統治の「一支柱・一機関(大山彦一、1940、p.491)」として利用し、その勢力拡大に積極的だったためである(大山彦一、1940、p.491)。したがってその中心人物は張政権関係者がほとんどであった<sup>8)</sup>。つまり満洲の紅卍字会の協力を得ることは張政権下の有力者と関係することであり、王仁三郎にはこのことが念頭にあった。その上でさらに広く動機を見ていくと、ストーカーは、①(第一次大本事件で)傷ついた自分の名声を修復すること、②日本の国益に愛国的に奉仕することとし(ストーカー、2009、pp.217-218)、川村邦光は、①アジア主義・国際主義的な視野から世界統一を目指すための新国家建設、②日本の人口食糧問題の解決とした(川村、2017、pp.266-270)。加えて長谷川雄一は、アメリカにおける1920年の排日土地法や1924年の排日移民法の施行を、王仁三郎が「孤立していく日本」ととらえたこともその要因としている(長谷川、1982、p.101)。そして松本健一が指摘するように以上を行う「べき」王仁三郎には自身こそ「選ばれし者」という意識があった(松本健一、2012、p.159)。

ここで王仁三郎の思想をさらに詳しく見ていく必要がある。王仁三郎は「正統」な国体的言説と同様の文言を用いながらも異端の「天皇主義」を唱えていた<sup>9)</sup>。それを端的に表すのが、国之常立神(大本教主神で天之中御主神・良の金神と同一視された)から「世界修理経綸の大命(『大正維新に就て』出口王仁三郎、1973、pp.155-179)」を与えられた伊邪那岐神が、「天下統治の神権(『大正維新に就て』出口王仁三郎、1973、p.155-179)」を授けたのが天照大神、という位置づけである。すなわち、国家神道の「最高神」を自らの「主神」よりも下位に位置づけたのである。これは、国家神道と根本的に対立するものであった。これに基づいて入蒙の際には以下の理論が加えられた。第一に「神の国」の実現。行き過ぎた近代主義は世界中に悪影響をもたらし、世界戦争が勃発しているためにこれを止めねばならない。それにはかつての「神の国」という理想郷の建設が必要であり、そこで宗教は一つに還る(「万教同根」)。

第二に「神の経綸」。国之常立神の「御神勅」に基づき、「祭政一致の天皇親政」を目指し、「東西の両文明が和合するか否か、東洋の精神文明が主となり、泰西の物質文明が従となるか否かに依てのみ、世界の平和は確立する(『人類愛善新聞』200号、1932)」ため、

8) 例えば陸軍上将の張海鵬や張惠景、袁世凱の下で國務総理した熊希齡などの軍人・政治家のほか、当地の財界、銀行、鉄道関係者らである(佐々、2020、p.1624)。

9) 川村によれば大本教には、①顕教：天皇親政翼賛、②密教：天皇親政輔弼、③秘教：王仁三郎を統治者とする「神政」実現という3つの要素がある(川村、2017、pp.372-373)。

東洋の「精神文明」の体現者かつ盟主である「神国」日本の天皇が世界に一つの「王」として統一すべきである。したがって日本人こそが「大使命」たる「神の国」建設を「皇道」によって行う（『人類愛善新聞』200号、1932）。

第三にモンゴル・満洲についてである。モンゴルは復古神道の色彩が強い大本教・王仁三郎にとって神代からの「大陸経綸の地場」であり（大本70年史編纂会編、上、1964、p.719）、自身が生まれ変わりであると自覚していた「世界帝国」の建設者チンギス・ハーンの故地でもあった（田中剛、2009、p.115）。それらは王仁三郎に、その地こそが「神の国」実現の第一歩の地であるという認識を持たせた。一方の満洲については先に述べた王仁三郎の現状認識に加え、肇国会<sup>10)</sup>の末永節らが明治期から唱えていた「大高麗国」構想の存在があった（長谷川、1982、p.100）。それは、朝鮮半島と日本を合邦化（「対等合併」）後、朝鮮半島から満洲への集団移民を行い、中国の変乱に乗じた満蒙の独立運動によって満洲・内外蒙古・バイカル湖以東の地域に「世界的中立国」を建設するというものである。長谷川によれば、王仁三郎はこの構想を引き継いで入蒙を行った（長谷川、1982、p.100）。以上から王仁三郎の動機のコアを明らかにするのは困難ではあるものの、その基礎には宗教的理想があり、その上部に彼が認識していた「日本」と教団の行き詰まった状況があったことは推察される。そして入蒙の手段を紅卍字会との提携で獲得した王仁三郎には、自身のそれまでの鬱憤をはらすような大冒険をしたいという野心もあったのだろう。これらが重なったところに入蒙は敢行される。

## 2) 入蒙の経過とそれぞれの思惑

入蒙にはどのような人物が関わり、いかなる経緯を辿ったのか。日本人の関係者は以下の三者に分けられる。①大本教団の王仁三郎側近：北村隆光、松村真澄、萩原敏明、植芝盛平、名田音吉、②陸軍奉天特務機関：貴志弥次郎機関長<sup>11)</sup>、その部下の大石良<sup>12)</sup>、井上兼吉<sup>13)</sup>、③その周辺の「大陸浪人」：元陸軍軍人で肇国会員・大本教信徒の岡崎鉄首<sup>14)</sup>（本名「岡

---

10) 肇国会は、1922年に末永節を中心として組織された国粋団体で、犬養毅や内田良平、さらには入蒙に深く関与した岡崎鉄首も会員であった。

11) 貴志は歩兵第二十連隊中隊長として日露戦争に出征し、歩兵第六十六連隊長、歩兵第三十一旅団長、奉天特務機関長などをへて大正13年陸軍中將となった。

12) 大石は奉天軍第三旅長の軍事顧問兼教官（大本70年史編纂会編、上、1964、p.728.）。

13) 井上は「第二次満蒙独立運動」に参加し当時は陸軍の諜報任務についていた（大本70年史編纂会編、上、1964、p.728.）。

14) 岡崎は陸軍特務員として1913年に中国へ派遣され、段祺瑞配下の陸軍少将呉非の顧問や、河南督軍顧問を務めた。その間、天津にて呉非とともに日刊漢字新聞『新中国報』を設立したのに加え、「奉天」では張作霖や趙倜らの許を得て『奉天旭華新聞』を設立して両新聞社とも顧問を務めた。入蒙時は張作霖の内意をうけ「祐東印刷所」技師長をつとめていた。彼はこの時期肇国会員で大本教信徒の「大陸浪人」であった（大本70年史編纂会編、上、1964、p.728、JACAR Ref. B03040700300（第2画像目）新聞雑誌発刊計画雑件「10、新中国新社設立ノ件」・Ref. B03040862600（第2画像目）新

崎藤次郎)], 退役海軍大佐で同じく大本教信徒の矢野祐太郎<sup>15)</sup>, 佐々木弥市 (別名「野田虎男」) らである。また, 日本人ながら「馬賊王」と言われた小日向白朗も道案内を依頼され王仁三郎と面会している (朽木寒三, 1966, p. 291)。

では, 上の人物を中心に入蒙が実現に至る経緯を見ていこう。1923年に紅卍字会との提携が成立し, 中国布教の手段を手にした王仁三郎は側近北村隆光を道院一行とともに中国へ派遣した。王仁三郎は自身の満蒙布教計画を北村に伝えていたのであろう, 北村はすぐに「奉天」(瀋陽)で武器商を営む矢野祐太郎と連絡して, 王仁三郎の中国受け入れ工作を開始した。おそらく矢野らはこの段階で, 王仁三郎の満蒙布教を張作霖軍閥をも巻き込む「行軍」とすることを思いついた。矢野は旧知の大陸浪人岡崎鉄首とともに, 張作霖配下の盧占魁將軍と連絡をつけたのである。

その盧とは満蒙独立運動に参加して頭角を現し, その後直隸派をはじめとして様々な勢力下を転々とした軍人である。察哈爾などに勢力を有し「蒙古の英雄」とも言われた彼は, 張作霖から招致されてその麾下に入り, 第一次奉直戦争では張の重要な戦力として奮戦した。矢野らと接触した当時は, 盧は自らの奉天軍閥が敗北したことで失意に陥り隠遁生活を送っていた (「貴志中将談出口氏入蒙の思出」昭和青年会編, 1934, 5, 「奉天軍外蒙出兵の端緒と大本教主の入蒙に関する情報」伊藤武雄ほか編, 1966, p. 272.)。張・盧らとの交渉過程については後述するが, この計画はその後矢野らから貴志弥次郎ら奉天特務機関の幹部に提案され, その「奇襲的成果」が期待され採用に至る (村上, 1973, p. 159)。というのは, 当時のモンゴルは清朝滅亡後の紛争で内・外蒙古に分裂し, 日・中・ソ・蒙それぞれの勢力が支配権をめぐる衝突を繰り返しており, 特に 1924年は独立運動が最も活発化し「モンゴル人民共和国」成立(1924年11月)が目前に迫っていた大混乱期であった。この状況下で奉天特務は, 王仁三郎を対張作霖工作の手段として, さらに日本の満蒙政策に何らかの積極的影響を与える「妙手」として利用しようと考えたのである (村上, 1973, p. 159)。この流れを見ると, 奉天特務と王仁三郎を引き合わせたのは両者と関係を持つ肇国会などの「大陸浪人」であったことが分かる。さらにこの関係を思想的に見ると具体的には不明なもの, 彼らの共通基盤は「天皇主義」であり, さらに言えば大本教信徒も多くいたことから王仁三郎によるそれであった。つまり入蒙では, 「天皇主義」が一つの媒介となった。そうであればこそ, 国祖国常之立神の神勅を受けた「大和民族」による「神の国」(=「宗教王国」・「蒙古王国」・「大本教王国」)建設という誇大な大義が強調されたのである。

以上のような経緯のもと, 王仁三郎は先述したように信徒らに突然の決意表明を行い中

---

聞雑誌ニ関スル調査雑件 第一「11, 新中国報」・Ref. B03040864900 (第2画像目) 新聞雑誌ニ関スル調査雑件第二巻「3, 奉天旭華新聞」以上外務省外交史料館)。

15) 矢野は元海軍の技術将校 (大佐) で, 1916年に海軍兵学校時代の恩師浅野正恭少将 (浅野和三郎の兄) の紹介で大本教に入信した。退職後は中国上海で商館を開いたが入蒙時には「奉天」で軍器販売の商店「三也商会」を経営していた (大本70年史編纂会編, 上, 1964, p. 728)。

国へと入った。同行したのは王仁三郎の助手植芝盛平、名田音吉、松村真澄の三名であった。一行は朝鮮半島経由で中国に向かい2月15日に奉天に到着して盧占魁と面会する。その際の動向について次のような報告が上がっている。

大本教出口王仁三郎ハ・・・十三日朝密ニ綾部出發神戸（宿所不明）ニ到リ同地ニテ幹部北村隆光ト落合ヒ十四日神戸港出帆ノ汽船（船名不明）ニテ青島ニ向ヒ出發シタルモノ、如ク而シテ其ノ用向ハ濟南道院本部ヲ訪問シ紅卍字教神戸道院開設ニ関スル打合ノ爲ニシテ尚北京紅卍字會及ビ紅卍字教ト大本教ノ提携ニ斡旋ノ勞ヲ執リト云フ南京領事林出権次郎ヲ訪問シ其ノ帰途候延爽、陸宗典等ノ道院幹部ヲ同伴本月末若ハ来月二、三日頃歸國スルモノ、如クニシテ・・・（JACAR Ref. B12081614200（第52画像目）宗教関係雑件／大本教ト紅卍提携ノ件「大本教主幹等旅行ニ関スル件」外務省外交史料館）

ここでは「神戸道院開院準備の爲二月十二日綾部発濟南に直行（JACAR Ref. B12081614200（第52画像目）宗教関係雑件／大本教ト紅卍提携ノ件「大本教主幹等旅行ニ関スル件」外務省外交史料館）」した北村と王仁三郎一行は神戸で落ち合い同時に青島へ向かったとしている。そしてその目的は神戸道院開設準備と認識しており、3月初頭には帰国するであろうとしている。さらに続けて見ていくとその目的が明らかとなってくる。少し先になるが同年3月22日の報告である。

豫テ支那「紅卍字教」ト連絡布教ノ計画ヲ爲シツ、アリシ大本教ハ今回愈世界紅卍字教ト結ヒ北滿方面一帯ニ該教旨ヲ普及スヘク第一着手トシテ曩ニ北村隆光等ヲ先発トシ奉天方面ヨリ陸行潜入シ次テ最近教主出口王仁三郎ハ・・・奉天公署印刷技師タリシ日本人岡崎鉄首（候成勲）及日本人氏名不詳（變名趙魁又ハ號武山）並趙作霖ノ部下ナル陸軍大尉王某ノ四名ハ三月六日洮南府城内ニ入りタル赴アリ（JACAR Ref. B12081614200（第76画像目）宗教関係雑件／大本教ト紅卍提携ノ件「大本教ニ関スル件」外務省外交史料館）

この報告では紅卍字会と連携して「北滿方面一帯」の布教に目的が変わっており、その陣容も少しずつ明らかになってきていることが分かる。

王仁三郎一行は2月15日18時30分に奉天駅に到着した（秋城生，1924，p.53）。そして「三也商会で、準備のために先着していた北村隆光・萩原敏明にむかえられたあとさらに岡崎鉄首・大石良・佐々木弥市と会見した（大本70年史編纂会編，上，1964，p.730）」。

この時すでに貴志、岡崎、佐々木らは隠棲していた盧占魁に大本教と連合して「蒙古王国」建国のため蜂起してはどうかと提案して合意を得ていたため（黒龍会編，1936，p.30），岡崎はこの席上で王仁三郎に盧と組んで蒙古に出るべきと勧めた。王仁三郎はそれに同意し、翌日盧の公館において提携を結んだ。そして盧は出兵の許可を得るため張作霖と交渉を開始した。張の反応は必ずしも好意的ではなかったが、盧に対して「匪賊討伐」の命令を与える形をとって一応はこれを承認した。その理由は、張が実力者盧を重要視し、うまくいけば王仁三郎とともに張家口から北京への進軍が可能になると構想したからと言われる（長谷川，1982，p.102）。さらに、大本教・王仁三郎が紅卍字会と提携していたことも



あった。前述のとおり張は紅卍字会を自らの統治に利用していたため、王仁三郎がその信者かつ提携相手の教主であったことは、彼の身分を保障するうえで重要であったと考えられる。

王仁三郎はあくまで武器を持たないことを宣言し（秋城生，1924，p. 55），自身の名刺に「彌勒下生達頼喇嘛 ミロクゲジョウダライラマ スンハン 素尊汗」などと書き、「西北自治軍」として入蒙を開始した。5月頃には王仁三郎は眼病，皮膚病，梅毒などを「鎮魂帰神法」によって治し，「行軍」した地域の人々から大きな支持を受けた（ストーカー，2009，p. 222）。そんな評判もあってか，公爺府においては数千人が「活仏」がいるらしいと押しかけてきた。こういった王仁三郎の超越的能力はあらかじめ紅卍字会が宣伝したことで現地人に知られていた。また紅卍字会の協力という点で見ると，有力信者の張海鵬が入蒙初頭に，王仁三郎のため酒宴を催し，馬1頭と護衛兵300人を贈ったこともあった（秋城生，1924，p. 58）。

### 3) 王仁三郎らの捕縛と救出

「行軍」の結末は惨憺たるものであった。張作霖の王仁三郎らに対する不信により，6月20日には盧占魁が，22日には王仁三郎らが捕縛され，同日盧は銃殺されたのである。それにまで至ったのは「一説には彼が直派に款を通ぜんとする為」もしくは「奉直関係の切迫せる時に当り，彼等を幫助するは利少なくして害多く，三省の治安」を維持する為であった（「満洲馬賊について 一，盧占魁の死」伊藤武雄ほか編，1966，pp. 803-804）。王仁三郎は「いざさらば天津御国にかけ上り日の本のみか世界守らん」と歌を詠んで覚悟を決め，一行の日本人らも銃殺される予定であった。その時の状況では①王仁三郎らを銃殺する，②外交問題へ発展しないよう証拠隠滅のため死体は焼却する，という段階までは決定していた（「土屋領事出口聖師一行の Painter 遭難當時を語る」昭和青年会編，1932，p. 32）。だが当時「奉天」の日本領事館に勤務していた土屋波平が「日本人遭難」の報を聞き，王仁三郎らが収容されている「敬公廳」において交渉を成功させたことで難を逃れた。土屋の回想によれば，「各方面の支那人に聞いて見てだん、真相が判り，（王仁三郎らは一引用者）田舎で捕まつて来た日本人が昨夜，鴻賓館といふ旅館から他へまた連れて行かれた事が判つた（「土屋領事出口聖師一行の Painter 遭難當時を語る」昭和青年会編，1932，p. 31）」という。6月26日，奉天日本領事館の船津総領事が張作霖に対し「至急出口等ノ身柄ヲ貴官（外務省亜細亜局長一引用者）ニ引渡ス（JACAR Ref. C08051310400（第3画像目）大正13年公文備考卷137雑件「外報3（1）」防衛省防衛研究所）」ように申し入れた。張はその際，「盧占魁ハ最近安廣ニ於テ富豪ヲ襲フカ如キ暴擧ヲ敢テシタルニ付斷然處罰スルコト（JACAR Ref. C08051310400（第3画像目）大正13年公文備考卷137雑件「外報3（1）」防衛省防衛研究所）」となつたと，盧処罰の理由を説明している。その後，王仁三郎らは日本側に引き渡され7月25日，中国の門司から下関港へと向かい帰国した。

### 4) 入蒙に対する反応

最後に入蒙に対する様々な反応を見ておきたい。すでに述べたとおり，入蒙について

日本政府は正確な情報を当初からつかめていなかった。入蒙を最初に国内に伝えたのは大本教の史料によると、4月20日に『大阪朝日新聞』が「洮南を経て外蒙古に向ったらしい事実あり。その目的はラマ教と相携へて大本教を宣伝し、・・・やがて大本教国樹立せんとの計画なりとの由」と報道した（大本70年史編纂会編，上，1964，p.751）。その後は頻繁に報道されているが、内容には変化がみられる。大別すると、①4月から5月にかけては王仁三郎を愚弄するような論調が多い。

巧々擔がれて馬鹿を見る王仁 張作霖が怒り出して例の馬賊の首魁を征伐

目下蒙古に潜入して居る大本教出口王仁三郎に就て奉天方面では種々雑多の噂が傳はつてゐたが十一日に至り張作霖氏は王仁等を擁立して東蒙古索倫山に立籠れる馬賊の頭目盧占魁の行動は地方の安寧を擾亂するものだとの理由の下に、鄭家屯の奉天軍第一旅長に之が討伐を命じたので同旅から歩兵一個■隊に若干の特科兵を附して討伐に向つた・・・（『東京朝日新聞』1924，5，14）

②7月以降王仁三郎捕縛の噂が出た後はやや論調が軟化している。

・・・出口は滿蒙地方の布教を思ひ居る際、本年二月支那浪人に唆かれ二月十五日來奉同夜盧占魁と面接し盧は軍隊編成の軍資金に窮せる折柄とて出口と握手し、出口の意見に共鳴したるが如く装ひ、盧は遣■後出口の布教に便宜を■與する條件として軍資金の貸與を請ひ出口は金策の上二十六万圓を貸與したそして入蒙の■■を爲し三月三日奉天から自動車で入蒙して盧の進軍を待つ中に六月四日支那■兵の討伐に驚き盧の一行と共に南下し二十一日遂に支那官憲に逮捕されたものである事件の経過より見て出口は全然支那浪人に利用され二十六万圓を棒に振つたもので罪として何等認むべきものはないが■■處分は免れまいと（「王仁は廿六万圓ぼうにふつた」『読売新聞』1924，7，19）

③その後は「冒険譚」のような記述が多くなる。

大本教主出口王仁三郎蒙古入の真相

蒙古皇帝を夢見たる彼王仁三郎！鎮魂歸神の秘法をもつて十萬の信徒を得終に、張作霖の妬視する處となり一旦内地に歸りたるも雄心勃勃々再挙を企てつゝある彼！彼も亦痛快兒！（増田義一編，1924，pp.38-46）

以上のような論調の変化は大本教・王仁三郎にとって重要であつた。報道により大衆人気を獲得し、教団復興と教勢の拡大が可能となったからである。

さらに、入蒙によって当時の日本人に滿蒙という存在を認識させたことも重要である。この8年後には滿洲国が「建国」されるが、そのイメージにおいて「先駆」を担つたのは王仁三郎であつた。行動自体は無謀であつたが、滿蒙はどのような場所なのかを冒険譚要素を交えて当時の日本人に強く訴えたのである。帰国した王仁三郎の入蒙談は、信徒に対してのみならず一般大衆にも十分な訴求力を持つものであつた。それは王仁三郎が探検家とか学者、政治家や軍人あるいは作家とは異なる「宗教家」であつて、「神の国」といった超越的要素を含みながら、尋常でないと思われる行動をとつたからであり、またそう大衆に思わせるだけの雄弁術を有していたからである。そうであればこそ、入蒙はのちに滿

洲事変と関連付けて次のように語られるようになった。

この滿蒙の天地に神教を宣傳する大膽なる活躍は、……その後この聖雄的事業はよく吾國策に實地先鞭をつけたものとして、同志の人々の力となり永く刺戟として生きてゐるのである。昨年滿洲事變の勃發以來心ある者には一層深く師の入蒙の意義を考へさせられる（南茂編，1932，p. 1273）。

他方，中国では例えば次のような反応があった。

日本邪教大本教主王仁三郎……即前因利用匪首盧占魁擾亂西北及東北各地被張作霖拿獲驅逐出境者，今復來中國，陰謀煽惑其有無重大背景，殊堪注意也云云（大連特訊「日邪教主竟來東北煽惑△以濟南紅卍字會爲大本營△作反抗中國國民黨之工具夢想設新中華王國」『大連中央日報』1929，11，1）。

これはのちの1929年に王仁三郎が滿洲を再び訪れた際のものだが，その行動は入蒙と並んで紹介され，大本教は「邪教」とされている。また、『内蒙古文史資料』にも「日本邪教主出口王仁三郎妄想在蒙古称王，勾结胡匪芦占魁在白音他拉（現在の通辽县）附近骚扰活动。不久，芦等被击毙，出口被逮捕遣返日本（中国人民政治协商会议内蒙古自治区委员会・文史資料研究委员会編，1984，p. 95）」との記述が見え，いずれも入蒙は日本の侵略とされている。しかし，いずれにしても入蒙によって大本教・王仁三郎の存在が日中両国の民衆に知らされ，一定の影響を与えたことは明らかであった。

### Ⅲ. 「世界宗教連合会」

#### 1) 発端

王仁三郎自身の名声を高め，教団の復興という点で有効であった入蒙だが，その目的たる「建国」は達せられるべくも無かった。おそらく王仁三郎は，自らのカリスマ性のみでは宗教・政治の両目的を達成することは困難であると考え，活動方針を転換した。その試みの一つが，本稿で取り上げる3つ目の事例「世界宗教連合会」（以下原則連合会）の結成である。大本教によればその発端は次のようなものであった。

1925（大正14）年の1月26日には，中国の李松年が亜細亜宗教連盟設立のために，綾部をおとずれてきた。そこで王仁三郎は，李松年を先導とし，同年陰曆四月一二日松村真澄に，世界宗教連合会についての全権をゆだねて，その成立をうながすために，松村を北京に派遣することにした。北京においては熱心な仏教家として知られていた洪徳滋が，李松年からつたえられた使命によって，世界宗教連合会成立のための準備をととのえていた（大本70年史編纂会編，上，1964，p. 766）。

李松年<sup>16)</sup>は「亜細亜宗教連盟」設立を目指して王仁三郎に面会しに来た。王仁三郎はそれに同意し，李に対して連合会を具体的に提案した。翌月，入蒙の際に動いた大本教信徒

16) 1895年天津県に生まれる。京師大学卒。1940年より天津特別市公署専員（中西利八編，1941，p. 980）。

岡崎が、李松年らは連合会結成に賛成であると王仁三郎に伝え、彼は側近の松村、北村、岡崎、さらに連合会に加わる事となる頭山満と内田良平の代理岡貞吉らを北京に派遣し、その準備に取り掛からせた。その結成を報じた『報知新聞』によれば、連合会は大本教を中心に結成され「共産主義とむじゅんしない宗教なら」加入を認めており、チベットのダライラマや「ダットン人」とも「宗教的連絡」があったという（「大本教が日本の宗教を代表—ペキンに世界宗教聯合会—頭山翁も発起人で」『報知新聞』1925, 6, 21）。

## 2) 目的

次に連合会の目的を知るためいままで知られていなかった「宣言書」を見ていこう。

吾人全教ノ行星中ニアツテ游息シー太陽系ノ地球ニ慈子糺スルコト誠ニ渺手トシテ小ナルモノデアル山海河流ニヨツテ種族ガ境シテ洲トナシ洲ニヨツテ國ヲ分チ國ニヨツテ種族カ分レテ居ル思ヘバ實ニ小ノ小ナルモノデアル然ルニ近時其區分カ嚴ニナツテ競争ガ益々烈シクナツテ来テ居ル智識ガ増進シ物質文明カ進ムニツレテ學説カ愈々紛糾シ来リ人心不安ニ襲ハレ社会國家モ大ニ変遷シテ来テ居ル而カモ生ヲ傷ケ道ヲ害シ其慘酷ナルコト其極ヲ知ラナイノミナラズ人禍頻リニ起リ不祥ノ氣ハ宇宙ニ充滿スルニ至ツテ之レニ加フルニ天然不可抗力モ亦起ツテ来タ仍チ火ハ人ト宅ヲ争ヒ水ハ人ト地ト争ヒ物ハ人ト食ヲ争フヤウニナツテ来タ山ハ呼ビ海ハ嘯キ維ハ裂テ柱ハ傾クヤウナ有様デ 風伯 雨師 馮夷 旱魃 蝗蝻 蝻賊ノ類ハ皆蠱起シテ人禍ト相争フヤウニナツテ来テハ實ニ悲憫ノ至リテアル吾人宗門ニ皈依シタモノハ原ヨリ國界モナク種族モナク階級ノ差別モナク含生負氣倫トシテ皆平等テアル救世ノ志ト云フモノハ國ヤ洲ヲ以テ界スルニ足ラナイ地球モ亦境トスルニ足ラヌ原ト共世界ハ無尽テアル然シ乍ラ生民ノ苦痛ヲ常ムルモノ時代ト土地ニ際限ナク又救済ヲ要スルモノニ至ツテハ恆河ノ沙デ敢テ数フ事ガ出来ナイ而モ吾人ノ生ハ涯リアレドモ知ハ限リガナイ此レ世界宗教聯合會必要ノ所以テアル夫レ世界ノ宗教ハ其ノ宗派経路ハ皆異ナルケレドモ救世ノ志ニ至ツテハ一ツテアル本會ハ但互助ノ精神ヲトリ衆善ノ協作ヲ圖ツテ恢弘ノ規矩制度ヲ設ケ慈悲ノ廣遠ヲ期スルノテアル教義ニ至ツテハ各相遠スル所テアツテ強イテ同等トスルノ要ハナイ學説ヲ演繹シ相互研究ノ便ニスルノミテアル斯ノ如クシテ初メテ一團陣中ニ各宗派アリテモ何等不都合ハ起ラナイノテアル甲宗ヲ可トシ乙宗ヲ不可トスルガ如キハ全く無用ノ業テアル (JACAR Ref. B12081586100 (第5-6 画像目) 七, 大本教ニ関スル件「大本教ニ関スル件」外務省外交史料館)

以上を要約すると、世界は洲・国・種族によって分かれているが、これは本当に小さきことである。近年ではその区分が激しくなり、さらに物質文明が進むにつれ学説が紛糾し、世界は不安定となって争いはますます激化している。この際、国境・種族・階級の別を問わず、「救世」の志を同じくする宗教者は連合会に集合し、互助の精神によって慈善活動を行う。教義は各々異なるから強いて同じにする必要は無く、相互研究の方法とするのみである。このようにすれば一つの団体に各宗派が存在しても何等の不都合は起こらない。以上は、明らかに紅卍字会の「五教合一」や大本教の近代主義批判、そして後述する救世



新教が唱えた大同思想などの要素で構成されている。各宗派の教義は互いの接近のために研究するものであって統一する必要はなく、各宗派の共通項を「救世」（そしてそのための慈善活動）としたことは、紅卍字会と大本教の連合運動において重要な指針となっていく。

さて、連合会の「章程」は1925年5月20日に後述する北平の悟善社において举行された、発会式ならびに会議において制定された。その際の状況は次のとおりである。

本年五月二十日中華民国北京半壁街悟善社ニ於テ世界宗教聯合會議ヲ開催セシ趣ナルカ大本教ニ於テハ海外宣傳課次長北村隆光ヲ派遣スル事トシ同人ハ曩ニ来朝セシ支那財政顧問李松年ニ随行シ同會議ニ参加シタル趣ナルカ出席者ハ約三十名ニシテ其主ナルモノハ別紙ノ如ク尚同會議ニハ發起人代表トシテ陸軍大将江朝宗座長トナリ陳明霖ナルモノヲ議長ニ挙ケ別紙宣言及規約ヲ決議シタルモ單ニ發會式ニ止マリ従員等ノ選舉モ行ハズ散解セシ趣ナリ（JACAR Ref. B12081586100（第2画像目）七、大本教ニ関スル件「大本教ニ関スル件」外務省外交史料館）

悟善社代表江朝宗が座長を務めた会議には、大本教の北村や李松年ほか後述する各宗教の發起人30人ほどが参加した。そこでは、道教代表の陳明霖が議長となり、宣言書と「章程」が決定された。以下にその「章程」の主なものを見ておこう（JACAR Ref. B12081586100（第7-8画像目）七、大本教ニ関スル件「大本教ニ関スル件」外務省外交史料館）。

- 第一条 本會ハ世界各宗教ヲ聯合シ相互ニ研究シ各宗教ノ眞諦ヲ發揚シ各民族ヲ勸動シ善ニ向ハシムルヲ以テ目的トス故ニ名ヅケテ世界宗教聯合會ト云フ
- 第二条 本會ハ統事所ヲ中華民国ニ設ケ評議會ノ議決ヲ經テ各国ニ分會ヲ設立ス
- 第四条 本會ニ入會セル各宗教ノ信徒ハ各該宗教ノ教義ヲ教規ヲ遵守スヘキモノトス
- 第十三条 本會定期會及臨時會ノ開會地ハ評議會ノ議決ニヨリ順次各國本會所在地ニ於テ之ヲ举行ス

ここで定められた主な事項は、①連合会は各宗教を相互に研究して各民族を「善」に向かわせる、②各宗教の教義を遵守する、③本部を中国に置く（総本部：北平悟善社、東洋本部：亀岡の大本教。さらに将来的には世界各国への分会設立を目指す）、④連合会は評議会制をとる、⑤4つの課を設ける、以上5点である。すなわち、連合会は「善行」として慈善活動を行いながら、宗派同士が相互に研究して意見を交換し、接近することを目指す「宗派組織化（Joel Amis, 2015, pp.94-96）」の動きであった。

### 3) 中国人参加者と悟善社（救世新教）

連合会には道院（以下各代表者：徐世光<sup>17)</sup>）、悟善社（江朝宗）のほか、全真教：道教（陳

17) 徐世光は、清朝の官吏で第4代中華民国大總統となった徐世昌の兄。1886年清国購買官吏、山東に送られ知府に任ぜられる。袁世凱が山東巡撫の時、青洲知府補助となり、すぐに済南知府となる。楊士驤が山東巡撫となると河防局勞務局に任ぜられる。1909年後は、山東省東部の登州、萊

明霖<sup>18)</sup>), 普照寺: 仏教 (諦閑<sup>19)</sup>), 「ラマ教」: チベット仏教 (チャンキヤ・ホトクト7世 (以下章嘉活仏)・黄玉), 清真寺: イスラーム (王振益<sup>20)</sup>), キリスト教 (譚福<sup>21)</sup>) らの中国人が参加している<sup>22)</sup>。連合会を多角的に捉えるため, この中から比較的実態が明らかとなっている悟善社を見ておこう。悟善社は1918年7月に悟善総社として創設され, 翌年北京において公式に成立した慈善団体である。1922年には宗教的要素を加味して「救世新教」と改称・改組されて(当時は「悟善社」のほうが有名だったため改称後もそのまま呼ばれた(末光, 1932, p. 256)) 宗教団体となった(酒井, 2002, p. 93)。扶乩に示される「神示」を奉じて慈善活動などを行うという点で, 1900年代初頭の中国における救世団体に定義される。教義は中国の儒教道徳や康有為の「大同」思想を基礎として, 「五教合一」の立場をとる。組織は, 教院や修院などを設け各地に分会を設置するなど紅卍字会と類似しているが, これは「姉妹関係」を意味し「其趣旨目的殆ど道院と同一」で(『瑞祥新聞』1926, 10, 1), 大本教とも提携していた<sup>23)</sup>。その指導層を見ると, 中心人物は政治家で軍人の江朝宗<sup>24)</sup>である。彼は1920年に友人の汪仲高から悟善社の存在を聞き, その後直皖

---

州, 青州などの海防管理にあたり東海税関監督となる。1914年天津租界に移り翌年4月には少卿を授けられ, 兄の徐世昌が國務卿時には濮陽黄河水防工事監督となりその功を以て勲四位を特別に授けられる。ついで近畿疏通河道事務督辦となったが1915年7月病気によって辞職。晩年は慈善事業に尽力し, 中国紅十字会会長でもあった。1929年没。(徐友春主編, 1991, p. 706, 支那研究会編, 1918, p. 310)

18) 陳明霖は, 北京に在る道教二大教派の一つ, 全真教の本山である白雲觀の道主。全真教は12世紀前半に華北地方で成立し, 『立教十五論』を教理とする。座禪や戒律を重視し『般若心経』も唱え, 道, 仏, 儒の合一を目指す。

19) 諦閑は, 「中国四大仏教名山」普陀山の住職。

20) 王振益は, 中国イスラーム社会のリーダー的存在で, 北京で最大・最古のイスラーム寺院清真寺に所属。日本人教徒で日本にその存在を詳しく伝えた田中逸平とも面会した。

21) 譚福は, 江西省九出身。九江同文学院, 南京金陵大学, 九江南偉烈大学を卒業後, 同大学および九江官立中学堂教員となる。1907年米国中央ウエスレヤン学校普通文科に修学し1911年に修士号取得。同年, シラキュース大学で法律を学び1914年法学士号。その後ボストン大学, ハーバード大学で教育学, 経済学を学んで1915年に帰国。同年, 北京青年会留学生通信部書記および教員となり, 1916年山西大学法律教員に任ぜられる。連合会参加時は民国大学, 北京大学教授であった(支那研究会編, 1918, p. 779)。

22) 朝鮮の普天教やドイツの白旗団も加わる(大本70年史編纂会編, 上, 1964, p. 769)。

23) 1925年3月26日, 大本教北村が済南を訪れ悟善社にも立ち寄ったことを契機に, その2ヶ月後, 連合会結成とほぼ同時の1925年5月(大本教の『瑞祥新聞』では1924年)に大本教との提携を実現させ山口県に支部を設立した(密素敏, 2007, p. 31)。

24) 江朝宗(1861-1943)は安徽省出身。道名慧濟(道院での名称)1915年12月袁世凱が帝位につくと「大典籌備処」処員となり, 三等男爵を授かる。そこから軍人として要職に就く。抗日戦争勃発後は, 1937年7月北平「治安維持会」会長に任命され, 12月日本傀儡「中華民国臨時政府」が北平において成立すると議政委員会委員兼北平市市長, 後に北平古学院院長に任ぜられる。1940年3月, 汪精衛傀儡華北政務委員会委員, 1943年辞任。中日密教会副会長。江は紅卍字会や同善社の

戦争（安直戦争）の際の貧民救済会で会長を務めた縁から加入した（密素敏，2007，pp. 10-11）。他にも段祺瑞，錢能訓，陸宗輿，曹汝霖，章宗祥，吳佩孚，夏同龢，鐘世銘など安徽派，安福派を問わず有力者が加入もしくは支援している。彼ら指導層には日本と関係を有していた者が多く，明治維新以降の日本を「欧米の政治学を師としながらも，極力神仏を信奉するという旧習を保存した（江朝宗，1938，p. 1）」と評価し，中国においても「政教一致」と「五教合一」を目指すとしている。以上のような悟善社は，この時期の中国における「五教合一」・「教派統合」を目指した「世界宗教大同会」や「万国道德会」とともに，その代表的存在であった（宮田，2015，p. 97）。つまり連合会は，中国における「教派統合」の系譜の中に結成されたものでもある。実際に各代表者がどの程度の活動をしたかは不明であるが，それでも東アジア地域において国家を越えて幅広い宗派の集合・接近を図ったことは画期的であった。

#### 4) 日本人参加者の目的

一方で，連合会に参加した日本人を見るとまた異なる性格が見えてくる。日本人はすべて「発起人」もしくは「賛襄員」という肩書で参加しており，大本教幹部以外では頭山満，内田良平，箕浦勝人，秋山定輔，田中義一などが名を連ねている。

「伝統的右翼」で肇国会・黒龍会会員の内田が王仁三郎と直接関係を持ったのは，入蒙後の1925年1月であった。内田は自らの意志で黒龍会の葛生能久らとともに王仁三郎と面会した（内田良平，11巻，1994，p. 99）。それはちょうど李松年が「亜細亜宗教連盟」結成を王仁三郎に持ち掛けた時であった。内田はこれを聞いて賛同し，頭山とともに連合会に名を連ねることとしたのである。もともと黒龍会の頭山，内田は，日本の大陸政策における宗教工作の重要性を認識しており，特にイスラームを重視し田中逸平や川村狂堂らとともに工作を行っていたため，連合会についても大本教を介した宗教工作と認識していた。その内田の思想を見ると，彼は大本教を「大日本宗主国を出現せんとする大精神（内田良平，11巻，1994，p. 95）」を有し，「天皇をして世界を知ろし召さしめ給ふ（内田良平，11巻，1994，p. 93）」ために活動するものであるとし，その外国布教は世界に「皇道精神を了解（内田良平，11巻，1994，p. 99）」させる黒龍会の目的と一致するとした。そして1930年には大本教信徒となっている<sup>25)</sup>。このことから内田は明らかに大本教の天皇・世界統一思想を信奉しており，それが彼と大本教をつなぐ基盤となったことが分かる。頭山も王仁三郎とは幾度か面会して懇意であり（川村，2017，p. 281，頭山満・出口王仁三郎，1935，pp. 127-137），連合会には内田が賛同したのち「支那人間ニ非常ナル信頼ヲ有シ居レル（JACAR Ref. B12081597800（第4画像目）五二，北京ニ於ケル世界宗教連合会ニ関

---

会員でもあった（徐友春主編，1991，p. 229，陳玉堂編，1993，p. 219，王治心，1940，p. 332など参照）。

25) 駄場裕司，2020，p. 149，また内田は紅卍字会が満蒙独立に重要な任務を果たすべきとし『満蒙の独立と世界紅卍字会の活動』を著して，紅卍字会日本総会の会長も務めた。

スル件「世界宗教聯合會設立ニ関スル件」外務省外交史料館)」人物として大本教の「松村等ニ於テ加名方懲憑（JACAR Ref. B12081597800（第4画像目）五二，北京ニ於ケル世界宗教連合會ニ関スル件「世界宗教聯合會設立ニ関スル件」外務省外交史料館）」され、これを承諾する形で加わった。そして内田とともに代理人の岡貞吉を連合会組織のため中国へ派遣した。

政治家としては、箕浦勝人、秋山定輔、田中義一の名前がある。全員、大正後期、昭和初期において大陸政策に強い関心を持っていた人物である。当時の大本教は、入蒙によって大衆人気を得たとは言え、いまだ国家の監視下に置かれ、特に海外での活動を行うことは外交問題とも直結するため大きな危険を伴った。そのような状況下では、内外で一定の信憑性や説得力を得るために、政治家の名が必要であったと考えられる。また、軍人では陸軍の上原勇作、山梨半造、三浦梧楼、海軍の山本権兵衛ら、元帥、大将クラスの者が加わったという（JACAR Ref. B12081586100（第13画像目）七，大本教ニ関スル件「大本教ニ関スル件」外務省外交史料館）。以上の日本人参加者の多くは、大陸侵出を強く主張した人物であり、その動機は宗教的理想からというより、大陸政策における宗教工作の必要性からであった。つまり連合会はその方途として考えられていたのである。

## 5) 満蒙との関係

では、実際に満蒙とはどのような関係があったのか。連合会発足当時のモンゴルの政情は極めて流動的であった。張作霖らは1925年2月から2か月ほど、「時局の糾紛を解決し、建設方針を討議する」目的で「善後会議」を開いた（哈木格図，2017，p.28）。会議には軍人・知識人・民族区域指導者や宗教指導者などが参加し臨時的な民意機関となった。そこに王蒙蔵代表として出席したのがパンチェンラマ9世と章嘉活仏で、前者はロサンを、後者は黄玉を代理として参加させた（哈木格図，2017，p.28）。

連合会はこのような状況下で、「ラマ教」（チベット仏教）代表として章嘉活仏を招致した。北京における松村真澄との会見で、彼は連合会結成を「怡々として、自分の本懐も實に此に存する（出口王仁三郎，1935，p.260）」と歓迎したという。さらに連合会は、大本教幹部の松村仙造を「大本教及本聯合會トハ全然關係ヲ絶」たせて、「本邦或ル資本家（匿名）ト共ニ聯合會喇嘛教代表者タル内蒙古章嘉活佛ト相圖リ（外蒙古活佛死亡以來現在内外蒙古ハ同活佛ノ自由權利圈ニ在リト云フ）蒙古開拓ニ従事（JACAR Ref. B12081597800（第5画像目）五二，北京ニ於ケル世界宗教連合會ニ関スル件「世界宗教聯合會設立ニ関スル件」外務省外交史料館）」させる計画を持っていた。つまり連合会は、大本教からすれば「蒙古開拓」に必要な章嘉活仏に接近するための手段でもあり、日本の満蒙侵出と分かちがたく結びついていた。そこでは例えば次のような活動が行われた。

・・・同會ノ事業トシテ近ク陸宗輿ノ斡旋ニ依リ滿蒙鉄道敷設及土地開拓ニ関シ支那政府ニ申請スルヤノ趣ナルカ如シ・・・（JACAR Ref. B12081586100（第13画像目）七，大本教ニ関スル件「大本教ニ関スル件」外務省外交史料館）

これは具体的には、1928年に連合会総務幹事で同計画を企画した「籌辦張多華興民業



軽便鐵路有限公司」代表李松年らを中心として、張家口から内モンゴルのドロンノールまでの区間に鉄道を敷設するという計画であった。この詳細は不明だが、それには章嘉活仏、黄玉、さらには中華民国大総統の徐世昌、黎元洪、段祺瑞や、呉佩孚など内蒙古、中国、満洲を含めて300人余りの有力者が参加した（籌辦張多華興民業輕便鐵路有限公司編、1928）。さらに、中国との関係についても次のような記述がある。

世界宗教聯合會ニ於テ支那會員トノ間ニ將來若シ日支外交ノ破綻ヲ見ルカ如キ事アル場合ハ會員相互聯絡ヲ執リ渦中ニ投セス又日支條約中支那ニ不利益ノ点ハ極力破棄スル事ニ聲援シ所謂人類愛善ノ本義ニ尽處アルヘシトノ會員間ニ密約アリ（JACAR Ref. B12081586100（第35画像目）七、大本教ニ関スル件「大本教ニ関スル件」外務省外交史料館）

日中外交に対しては、政府間の条約に反対することも辞さない態度を鮮明にし、「民間外交」的な活動をしようとしていた。このような政治的活動は、日本政府から特に警戒されることとなった。

ところで連合会はいつ頃まで活動していたのか。先行研究および史料上においては記述が無いが、「長くは続かなかつた」というのが定説である（少なくとも1928年までは続いていたことが鉄道敷設計画の史料から窺える）。その原因は、各宗派の「宗教エゴイズム」が強く、各々が「自分の宗教のよきことのみを主張」したことであり、王仁三郎は連合会に派遣した松村真澄に「帰れ」と電報を打ち（武藤亮飛、2016, p. 35, 出口三平・清水巖三郎、2015, p. 174）、この活動は終わりを迎えた。

## おわりに

以上、紅卍字会と大本教の提携初期における活動を、満蒙との関係に注目して考察してきた。そこからは主に次の三点が明らかになった。

第一に、提携は両教団が自団体の維持・拡大を動機とし、それに「五教合一」と「万教同根」の一致や、神託などの宗教的根拠が伴ったのが実態であった。紅卍字会はキリスト教の影響を受けながら「五教合一」論を具体化させ、その上で慈善活動を行うなかで、さらなる教勢拡大を目指した。一方の大本教は教団復興の一手を中国布教に求め、その方法を提携によって獲得しようとした。これは外国の“他教”を“同教”と見なしたものでありかつ、「日中親善」の意図を含むものであった。日本政府は当時想定されえなかった外国宗教との提携を否定的に捉え、両教団への警戒を強めた。

第二に入蒙について。紅卍字会との提携で中国布教の方法を得た王仁三郎は、引き続き教団復興と自身の名誉回復を目指しており、その一手を入蒙に求めた。これは自身の天皇思想に基づく、国祖国常之立神の神勅を受けた「大和民族」による「神の国」建設という考えや、当時の日本に対する資源・人口など現実的な問題意識によるものであった。入蒙の実現には、奉天特務やその周辺の肇国会や大陸浪人らが関わった。奉天特務は日本の満蒙侵出政策の「奇策」として、肇国会は「大高麗国」構想の実行としてこれを実現させよ

うとした。さらに彼らの仲介によって張作霖とも関わり、その部下の盧は「匪賊討伐」の名目で挙兵した。張の統治機関となっていた紅卍字会は、有力信者の張海鵬を中心に入蒙に協力し、王仁三郎の入蒙を宣伝したりした。このような入蒙の意義は、①当時の日本人に満蒙の存在を認識させた、②王仁三郎の大衆人気を向上させ教団復興の契機になった、③満蒙が両教団の活動の中心地となったことである。そしてここにおいて連合運動は、日本の大陸侵出という政治的意図を色濃く表すこととなる。

第三に、世界宗教連合会には大きく分けて二つの重要な意義があった。まず宗教上の意義。連合会は、未統一の各宗派が「救世」を軸として集合・接近することを目指す、いわゆる「宗派組織化」の動きであった。つまり、連合会は「宗教統一」よりも各宗派の協力体制を築くことに重点が置かれた活動であった。いま一つは政治的意義である。連合会は王仁三郎らによる満蒙開発への手段および「日中友好」の手段としても結成された。鉄道敷設計画やモンゴルの有力者との接触はその一環である。また、日本の大陸侵出における宗教工作の目的もあり、日本の「アジア主義者」らは連合会を利用しようと考えた。そこには内田良平の大本教入信に見られるように、大本教・王仁三郎による天皇思想も影響していた。この後、黒龍会は大本教を介して紅卍字会と関係を築いていくこととなる。

以上から、1923年から1925年の提携初期は、両教団にとって暗中模索しながら様々な宗教と政治の限界に挑戦し、両教団の宗教・政治における方針を決定づけた期間であったと言える。すなわち、東洋的価値観を評価しながら宗教的普遍主義をも包含した両教団は、既成教派を超越した「超宗教」の志向と、自団体の維持と拡大という目的によって提携し、そこに政治的な目的を併行させていくのである。その下で満洲に根を下ろす紅卍字会は、後に大本教が設立する人類愛善会と共に慈善、宣伝事業を行い、さらには関東軍など日本側の公的機関とも関係して大陸政策を強く後押しするようになっていく。それはほかならぬ、「満蒙独立国」建国の一大勢力となることを意味したのである。

(たまおき ぶんや・愛知学院大学大学院博士前期課程)

## 【文献】

(日本語)

伊藤武雄ほか編 (1966), 『現代史資料』32巻 (満鉄2), みすず書房

内田良平 (1931), 『満蒙の独立と世界紅卍字会の活動』先進社

内田良平 (1994), 「満蒙対策緊急意見書」内田良平文書研究会編『内田良平関係文書』第10巻, 芙蓉書房出版

内田良平 (1994), 「時代思想の顕現せる天理教と大本教」内田良平文書研究会編『内田良平関係文書』第11巻, 芙蓉書房出版

江口宏 (1932), 「土屋領事 出口聖師一行のPainter遭難當時を語る」林二郎編『昭和』昭和青年会

- 王治心（1940），『支那宗教思想史』（富田鎮彦訳）大東出版
- 大本70年史編纂会編（1964），『大本70年史』上巻，宗教法人大本
- 大山彦一（1942），「道院・紅卍字会の研究」『研究既報』第三輯，建国大学研究院
- 河津雄次郎編（1924），『神の國』3月10日号，天聲社
- 川村邦光（2017），『出口なお・王仁三郎—世界を水晶の世に致すぞよ』ミネルヴァ書房
- 葛生能久（1936），『東亜先覚志士記伝』下，黒龍会
- 朽木寒三（1966），『馬賊戦記：小日向白朗と満洲』番町書店
- 興亜宗教会編（1941），『世界紅卍字会道院の実態』興亜宗教会
- 黄蘊（2011），「近代中国の扶鸞結社—徳教からの考察」『東アジア文化交渉研究』3号，関西大学文化交渉学教育研究拠点（ICIS）
- 神戸主会編纂会編（1972），『大本神戸主会沿革史』大本神戸本苑
- 黒龍会編（1936），「四，蒙古建国運動と盧占魁」『東亜先覚志士記伝』下，黒龍会出版部
- 五重塔人（1923，1924），「夢の蒙古王國（王仁三郎と盧占魁と張作霖）」上・中・下（『太陽』第30巻13号・14号・第31巻1号，博文館）
- 酒井忠夫（2002），『近・現代中国における宗教結社の研究』国書刊行会
- 佐々充昭（2020），「大本教と道院・紅卍字会との提携—宗教連合運動に内包された政治的含意—」『立命館文学』667号，立命館大学人文学会
- 品川義介（1957），「山荘を廻る人々—合気道の開山，植芝盛平翁（中編）」品川義介編『野人の叫び』191号，野人の叫び社
- 支那研究会編（1918），『支那官紳録』支那研究会
- 秋城生（1924），「出口氏の蒙古入りと盧占魁の死」河津雄次郎編『かみのくに』天聲社
- 昭和青年会編（1932），『昭和』昭和青年会
- 昭和青年会編（1934，5），『昭和』昭和青年会
- 末光高義（1932），『支那の秘密結社と慈善結社』満洲評論社
- 孫江（2012），「地震の宗教学」（『近代中国の宗教・結社と権力』汲古書院）
- 孫江（2012），「植民地の宗教結社—『満洲国』と紅卍字会を中心に」（『近代中国の宗教・結社と権力』汲古書院）
- 田中剛（2009），「成吉思汗廟の創建」森時彦編『20世紀中国の社会システム：京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター研究報告』京都大学人文科学研究所
- 駄場裕司（2020），『天皇と右翼・左翼—日本近現代史の隠された対立構造』ちくま新書
- 出口宇知丸・大本総務上西六合隆ほか（1924，2，28），書簡
- 出口王仁三郎（1973），『出口王仁三郎著作集』第2巻，読売新聞社
- 出口王仁三郎（1935），『出口王仁三郎全集』6巻，天聲社
- 出口三平・清水巖三郎（2015），「宗教のつなぎ方—大本の宗教提携と平和運動をめぐる—」『人文學報』京都大学人文科学研究所

- 頭山満・出口王仁三郎（1935），「頭山満氏・出口王仁三郎氏縦横談（インタビュー）」『キング』5月号，大日本雄弁會講談社編
- 中西利八編（1941），『滿華職員録』滿蒙資料協會
- ナンシー・K・ストーカー（2009），『出口王仁三郎—帝国の時代のカリスマ』原書房
- 長谷川雄一（1982），「大正中期大陸国家へのイメージ—「大高麗国」構想とその周辺—」『国際政治』71号，日本国際政治学会
- 哈木格図（2017），『内モンゴル民族主義運動の研究（1924～1937年）』（広島大学大学院総合科学研究科博士論文）
- Prasensjit Duara（2011），「二十世紀アジアの儒教と中国民間宗教」（武内房司編『越境する近代東アジアの民衆宗教—中国・台湾・香港・ベトナム，そして日本』明石書店）
- 増田義一編（1924），『東京』第1巻，第3号，実業之日本社
- 松本健一（2012），『増補 出口王仁三郎—屹立する最後のカリスマ』書籍工房早山
- 滿洲國民生部厚生司教化科編（1943），『滿洲國道院紅卍字會の概要』民生部厚生司教化科
- 南茂編（1932），『宗教大觀』第3巻，読売新聞社
- 宮田義矢（2015），『教義の中の近代—道院・世界紅卍字會の教義形成研究—』東京大学大学院人文社会系研究科博士論文
- 武藤亮飛（2016），『現代日本における宗教間対話の実証的研究』筑波大学博士論文
- 村上重良（1973），『出口王仁三郎』新人物往来社
- 村上重良（1974），『『興亜』と『東亜経綸』—大谷瑞光と出口王仁三郎のアジア主義』（石田充之，滝沢克己編『浄土真宗とキリスト教：星野元豊教授退職記念論文集』法蔵館）
- 山口利隆（1938），『大和民族運動—皇道宣揚と世界紅卍字會』國體信仰運動事務所
- 山口利陸（1957，3，25），「世界紅卍字會の特使訪日の追想」『東瀛道慈月刊』第1巻3号（中国語）※拼音順
- 陳明華（2014），「权力变迁与新兴宗教的应对以世界红卍字会徐州分会会址纠纷为中心的考察（1921-1936）」『浙江大学学报（人文社会科学版）』44巻No. 5，浙江大学学报編集部
- 陳玉堂編（1993），『中国現代人物名号大辞典』浙江古籍出版社
- 籌辦張多華興民業輕便鐵路有限公司編（1928），「籌辦張多華興民業輕便鐵路有限公司章程」籌辦張多華興民業輕便鐵路有限公司
- 褚瀟白（2019），「民国道院与基督教的互動—本文与個案研究」『宗教』2019年第2期，中国人民大学書報資料中心
- 道德社編集部編（1923），『道德雜誌』第3巻6期，濟南道德社
- 杜博思（2012），「政治与慈善：20世紀二三年代的道院暨世界紅卍字會」社会问题研究丛书编辑委员会編『会党，教派与民间信仰—第2届中国秘密社会史国际学术研讨会论文集』知识产权出版社
- 高鵬程（2011），『紅卍字會及其社会救助事業研究（1922-1949）』合肥工業大学出版社



- 高鵬程 (2015), 『近代紅十字会与紅卍字会比较研究』 合肥工業大学出版社
- 江朝宗 (1938), 『救世新教』 北京救世新教總會
- 濟南道院編 (1923, 9, 10), 『哲報』 第2卷, 第25期
- 救世新教總會編 (1922, 3, 3), 『要志』 第2卷第35期, 救世新教總會
- 李光偉 (2012), 「民国道院扶乩活動辨正」『会党, 教派与民口信仰』 知識產權出版社
- 李光偉 (2017), 『世界紅卍字會及其慈善事業研究』 合肥工業大学出版社
- 密素敏 (2007), 「民国悟善社研究」 中国人民大学清史研究所論文, 未刊行
- 瀋陽道院編 (1932), 『道慈綱要大道篇 (二)』 世界紅卍字會道慈研究所
- 世界紅卍字會中華總會編 (2000), 『世界紅卍字會資料彙編』 世界紅卍字會中華總會
- 孫江 (2016), 『孫江自選集作為他者的宗教—近代中國的政治宗教』 博揚文化
- 萬奉桓編 (1935), 『道慈雜誌』 第2卷15号, 道慈雜誌社
- 徐友春主編 (1991), 『民国人物大辭典』 河北人民出版社
- 虛谷子 (2016), 「浅評唐煥及其『世界宗教大同会』—兼從道教的角度看邪教」 香港道教学院編『弘道』  
2016年第2期
- 中国人民政治协商会议内蒙古自治区委员会・文史资料研究委员会編 (1984), 『内蒙古文史資料』 第  
15輯  
(英語)
- Alexandra Pfeiff. (2018), *Two Adoptions of the Red Cross: The Chinese Red Cross and the Red Swastika Society from 1904 to 1949*. The degree of Doctor of History and Civilization of the European University Institute.
- Joel Amis. (2015), *The Japanese new religion Omoto : Reconciliation of nativist and internationalist trends* Mémoire. Montréal (Québec, Canada), Université du Québec à Montréal, Maîtrise en sciences des religions.
- Prasenjit Duara. (1997), Transnationalism and the predicament of Sovereignty : China, 1900-1945, *The American Historical Review*, No. 4
- Prasenjit Duara. (2004), *Sovereignty and Authenticity: Manchukuo and the East Asian Modern*, Rowman & Littlefield Publishers
- Thomas David DuBois. (2011), “The Salvation of Religion? Public Charity and the New Religions of the Early Republic” 民俗曲藝, 172 (2011.6), 施合鄭民俗文化基金會  
(JACAR アジア歴史資料センター)
- JACAR Ref. B12081614200 宗教関係雑件／大本教ト紅卍提携ノ件 (外務省外交史料館)
- JACAR Ref. B12081614300 宗教関係雑件／大本教ト紅卍提携ノ件 (外務省外交史料館)
- JACAR Ref. B12081586100 七, 大本教ニ関スル件 (外務省外交史料館)
- JACAR Ref. B12081580300 宗教関係雑件第三卷 (外務省外交史料館)
- JACAR Ref. B12081597800 五二, 北京ニ於ケル世界宗教連合会ニ関スル件 (外務省外交史料館)

JACAR Ref. B03040700300 新聞雑誌発刊計画雑件「10, 新中国新社設立ノ件」(外務省外交史料館)

JACAR Ref. B03040862600 新聞雑誌ニ関スル調査雑件 第一「11, 新中国報」(外務省外交史料館)

JACAR Ref. B03040864900 新聞雑誌ニ関スル調査雑件第二卷「3, 奉天旭華新聞」(外務省外交史料館)

JACAR Ref. C0851310400 大正 13 年公文備考卷 137 雑件「外報 3 (1)」(防衛省防衛研究所)

(新聞資料)

『大阪朝日新聞』

『華北日報』

『人類愛善新聞』

『瑞祥新聞』

『大連中央日報』

『東京朝日新聞』

『報知新聞』

『読売新聞』